

保育者養成校における人間関係の授業改善に関する一考察 ～グループ・ディスカッションを用いた事例学習の効果～

桑原広治・森久美子

A study on class improvement for human
relations at training schools for nursery-school teachers
-Effects of case studies using group discussion-

KUWAHARA Hiroharu and MORI Kumiko

Abstract

According to the survey data of the Ministry of Health, Labor and Welfare about the turnover rate of childcare workers, it has been reported that “25%” of new graduate childcare workers leave their jobs within one year after starting work, and “about half” leave their jobs within three years. One of the reasons for this is that many students are worried about their relationships with friends at the time of admission and during their student life. When they are in educational settings, they have to build a wide range of relationships with parents and colleagues. Therefore, in this study, we have worked on while going back and forth between the human relations of adults (students) and the human relations of infants by fostering a sense of ownership among students through case studies and by having students output through group work.

Key words: turnover rate, inter-subject collaboration, group work, output, communication

キーワード： 離職率、科目間連携、グループワーク、アウトプット、コミュニケーション

1 問題意識と目的

経験知の少ない学生にとって子ども間の人間関係を理解するには、まずは学生間の人間関係を学ぶ必要がある。さらに、現場の保育者との人間関係や保護者との人間関係を学ぶには、「短期大学と現場の乖離」を限りなく近づける教員の手立てが重要である。与えられた時間は学生だけでなく、教員にも2年間しかない。2年間という短い期間に「大学と現場をどうつなぐか」を教材研究のベースにおかねばならない。

入学してくる学生のスタートラインは皆違

う。1年次の前期も後期も、2年次の前期も後期もそれぞれ違う。常に教員が当事者意識をもって学生の学びのレベルを把握して分析・共有を行うことが重要である。それによって、「目的意識」と「授業に振り返り」を各教員が行うことで「社会人基礎力」を身に付けた学生に育っていく。この目的意識のよりどころになっていくのが「建学の精神」である。

本学学長の卒業メッセージの中に「魅力ある人間とは『自己を他者に生かす』人間のことでした。自分を他人に生かす。自分の持っている力や時間を、人のために使う。そのような人間

のことです。『隣人』とは隣に住んでいる人のことではありません。街で困った表情のお年寄りがあいてします。その時、皆さんが『どうされましたか』と声をかけた時、その方は皆さんの隣人となるのです。隣人とは皆さんが会える弱い人や小さな人のことでした。また、魅力的な人間は『いのち』を大切にできる人間でもあります。命を正しく愛すること。人の命を大切にすること。この二つです。命とは、自分が使える時間のことです。そして、この時間をどのように使うかが問われます。時間を他者のために使い、自分を隣人に役立て、命を豊かなものにするのか。それとも、自分の事だけに使い、自己のカラの中に閉じこもり、命を乏しいものにするのか。」(1)と述べてある。

短期大学の今後の在り方によれば、「教養教育と専門教育のバランスの取れた高等教育期間には、短期大学の教養教育と専門教育は、短期大学が目指す幅広い人間教育の実現に向けて、教育課程だけではなく、整備されたキャンパス内での学生と教員や学生相互の啓発・交流活動や、ボランティアやインターンシップ等、地域と連携した学外活動によって補完されている。また、短期大学の職業教育は、教養教育の基礎に立ち、分析的・批判的見地に立ったものの見方を育むもので、特定の職業分野の専門的スキルを伝授する職業教育とは異なる特長を持っている。特に、短期大学卒業生の占める割合が圧倒的に多い幼稚園教諭と保育士においては、他の学校種にはない、汎用的な職業能力を育む短期大学士課程の特徴が、就職時や職務活動上における卒業生の評価につながっていると考えられる。」(2)と述べている。

岸は「保育の場は保育者と子どもをはじめとする様々な人間関係が織りなす世界である。この人間関係は出会いに始まり、何らかの変容を経て深まっていくものである。現代において、少子高齢化や核家族化、都市化、情報化、国際化など子どもを取り巻く環境の変化がめまぐるしい中で、人間関係の土台作りをする家庭の変容によって子どもの豊かな人間関係作りが根底から揺らいでいる状況がある。こうした状況の

中で、家庭を支え子ども同士のかかわりや人間関係を育む集団保育の場として、幼稚園や保育所における保育の質とともに保育者の専門性が問われてきている。」(3)と述べている。

濱名は「保育者の早期離職問題を、養成教育との接続の観点から考察すると、保育の力量や専門の問題というよりは、職場の人間関係や管理職との関係、また職場の文化への適応におけるつまづきが多く見られる。保育者に求められる資質能力に関して国などがスタンダードを出しているが、養成教育では、保育技術や子どもと対応する力といった専門性の向上の前に、いわゆる社会人基礎力にあたる力の要請を重視する必要があるといえる。」(4)と述べている。

神垣は「近年の保育者養成校の学生が抱く保育者のイメージは、『子どもが好きで、健康で、明るくて、ちょっと子どもと遊ぶことができれば勤まる仕事』である。しかし、保育者の実際の業務内容はそのような簡単なものではない。例えば、子どもの叱り方や褒め方、諭し方の一つであっても、そこに関して言えば、保育者の側に、望ましい人間関係を築くための能力が十分に備わっていなければ、子どもへの介入の際に適切な援助を行うことは難しい。すなわち、領域『人間関係』の目指すものは、子どもにとっての課題であると同時に保育士養成校に在籍する学生にとっての課題でもあるといえる。」(5)と述べる。

さらに神垣は「保育者養成校における領域『人間関係』の授業において、子どものいざこざ場面に対する望ましい介入を個別に考えた後にグループ・ディスカッションを通して考える形学習(事例学習)を導入し、それによって学生の知識の獲得と対人スキルの向上が同時に「達成可能かどうか調べた結果、学生は、個別に介入を考えるよりもグループ・ディスカッションを通して介入を考えたほうが獲得する知識が多く、また、しおれらの知識の獲得も早いことが明らかとなった。さらに、事例学習の前後で、学生のディスカッションについてのイメージがポジティブな方向に変化し、獲得した知識を実際場面へ応用できるようになったことが明らか

となった。」(6)と述べる。

経験知の少ない学生に保育原理を身近なものとして理解してもらうには、「短期大学と現場の乖離」を限りなく近づけることは重要である。教員には、2年間という短い期間に「大学と現場をどうつなぐか」を教材研究のベースにおかねばならない。2年後は、短期大学の卒業生だけでなく、専門学校、4年生大学など様々なキャリアを積んだ卒業生が同じスタートラインに立つ。まず、教員は4年生大学との違いを念頭に置きながら、短期大学の保育者養成を考える必要がある。ともに、「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」の育まれる比重が異なることにある。つまり、4年生大学は、「基礎学力」「社会人基礎力」「専門知識」を4年間かけて取り組むことができる。しかし、短期大学は、2年間で専門知識が中心のカリキュラムで実践力が同時に育むことが求められる。

今回の研究では、入学時から友達が作れない、学生間の友人関係で悩む、途中で人間関係に悩む学生や友だちの輪の中において笑顔を出せる力を育むためにも、学生の経験知をより豊かに促進するための授業改善に取り組んできた。

藤原は「人間関係をどうすれば深められるかについて、相手に素早く『フィードバック』しましょう。あなたの反応を相手は不安な気持ちで待っているから。気の利いた『フィードバック』は人間関係に効く薬です」(7)と述べている。

中谷は「人とかかわりから自ら学ぶ方略を身につけていくうえで、社会的認知理論の見地からすると、モデリングが重要な役割を担っているものと思われる。子どもの学習は、人とかかわりを基盤にしながら、自律性を帯びるようになっていく。学校教育における教室場面において学習の問題を考えると、モデルは教師にかぎられたものではないだろう。様々な能力と個性をもちあわせたクラスの仲間が存在が、多様な機能を有するモデルとなりうることに留意しておく必要があるだろう。学校における教室は、実に多様なモデルが互いにかかわりを持ちあい、交差する場であり、そこには複雑なモ

デリングのプロセスが潜んでいるものと思われる。」(8)と述べている。

本研究は、入学した学生のスタートラインを踏まえて学生理解に努め、筆者が主に担当する他の科目等(保育原理、言語表現、人間関係、保育・教職実践演習)の「科目間連携」と「逆向き学習法」で「考える力」を2年トータルで醸成する授業実践研究である。よって、各科目の授業では、関連する内容は一人ひとりの学生に寄り添う「授業改善」を図りながら「繰り返す」ことになる。

毎回の授業での振り返りを自分の言葉で考察する学びを通じて学生が成長し、変わっていく様子は説得力があるのではないか。学生にとっても「人間関係と自分の仕事」とのつながりを実感し、何かを判断する時の基準になっていくことが理解できよう。

あらかじめ、人間関係の専門的な手続きを経た研究ではないこと、数量的な分析を用いた研究ではないことを断っておく。

2 研究の方法

(1) 対象及び方法

1年次前期開講の卒業必修、免許・資格必修、科目「人間関係」

受講生 37名

15回の講義とともに、事例問題を通して、筆者の担当科目(日本国憲法、言語表現、保育原理)を科目間連携の観点で「関連」させながら授業を展開する。

学生は、授業の「振り返り」を自分の言葉で「考察」できる力をめざす。さらに、授業では、「考察の共有化」を図り、学生個々の「考える力」を高めるための授業改善の研究を進めていく。

なお、授業の「振り返り」は、前半がシートで、後半は「チャットメール」で提出する。

(2) 倫理的配慮

本研究の性質上、学生の授業の振り返りを取り上げる。その際、学生には、氏名なしで情報を共有して学習する視点から研究参加の同意を

得ている。

(3) 当事者意識と「つなぐ力」を意識した授業実践

授業の到達目標に到達するための授業改善を行う。

授業改善にあたっては、科目間連携と逆向き学習法で授業を進める。

逆向き学習法とは、学生が入学し、2年後に保育現場に就職する4月を想定し、必要となる資質能力に優先順位をつけ、学生の実態との相関を考えて授業展開していくものである。

学生によっては、同じことを繰り返していると思わせない「関連」の視点が解説や授業展開が重要である。なお、逆向き学習を進めるにあたって、個人差に対応するために「2年間をトータルで指導する」ということである。

3 研究の実際

授業を進めるにあたっては、筆者が担当する科目（日本国憲法、言語表現、人間関係、保育教職実践演習等）は、すべて「科目間連携の視点から授業の基本的な流れは同じである。毎回の授業での振り返りを自分の言葉で考察する学びを通じて学生が成長し、変わっていく様子は説得力があるのではないか。学生にとっても「人間関係と自分の仕事」とのつながりを実感し、何かを判断する時の基準になっていくことが理解できよう。

授業と振り返りはセットで考えることを繰り返し伝えた。学生は、授業の「振り返り」の中で、どのように「考察」しているかに重点をおき、短大生として「考える力」の成長をめざす授業改善のための研究を進めていく。

人間関係の授業の始めに日本国憲法の基本的人権（第11条）について取り扱う。なぜなら、基本的人権には「生存権や表現の自由などいろいろな権利が含まれており、保育者として子どもが尊重されているかを常に意識して自らを問い返し、学んでほしいからである。また、「生存権」（第25条）では、「子どもにとって『健康で文化的な最低限度の生活』とは何かを意識

して、子どもや保護者の生活に目を向けてほしい。そして、15回を通して、人権をベースに置いた人間関係の授業を展開する。そして、筆者が担当する科目間連携も学びの往還に取り入れる。

そこで、学生が主体的かつ積極的に学び、アウトプットできる専門性を育てるには、どのような授業展開が効果的であるかを具体化して取り組み、その効果を考察して次年度以降の授業にいかしていきたいと考えた。

(1) 学生理解のための現状把握

スタートラインはみな違うという観点からスタートする。

授業は、自己覚知と逆向き学習法で進める。

自己覚知とは社会福祉の中で主に使われる。しかし、自己覚知は関係の中で生きるすべての人に求められる姿勢であると考えている。よって、学生は、自分が見聞きしたこと、触れたこと、体験したことから感じる自分の受け止め方や反応の仕方以自己を認識することである。

犬飼らは「保育者として子ども・保護者に向き合う専門的な力量はもとより、同時に組織内における保育者集団の一員としてそこでの人間関係も、多様な勤務形態や時々状況に照準を合わせ、関係を構築していく能力が求められる。つまり専門職としての養護・教育技能に加え、それを円滑な人間関係の中で豊かに展開し、さらに維持・安定させ、必要な改善に対しては自らが行動を起こし問題解決に立ち向かう姿勢など、組織において自己の持つ機能を十二分に発揮する力が求められるといえよう。」(9)と述べている。

逆向き学習法とは、学生が入学し、2年後に保育現場に就職する4月を想定し、必要となる資質能力に優先順位をつけ、学生の実態との相関を考えて授業展開していくものである。

逆向き学習法をとる。逆向き学習法とは、学生が入学し、2年後に保育現場に就職する4月を想定し、必要となる資質能力に優先順位をつけ、学生の実態との相関を考えて授業展開していくものである。なお、逆向き学習を進める

にあたって、個人差に対応するために「2年間をトータルで指導する」ということである。

(1) 授業計画

1	オリエンテーション 保育内容「人間関係とは」何か	9	乳児期における「人間関係」(1):0歳児の人間関係
2	幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領における「人間関係」のねらいと 内容(1)3歳以上児について	10	乳児期における「人間関係」(2):1歳児の人間関係
3	児期における「人間関係」(1):3歳児の人間関係	11	乳児期における「人間関係」(3):2歳児の人間関係
4	幼児期における人間関係(2):4歳児の人間関係	12	「人間関係」の育ちを支える保育者の役割(2)
5	幼児期における「人間関係」(3):5歳児の人間関係	13	乳幼児期における「人間関係」のまとめ: ほかの領域との関連性と子どもの「人間関係」の育ちを支える指導計画の作成
6	「人間関係」の視点より実習を振り返る	14	「人間関係」における今日的課題
7	「人間関係」の育ちを支える保育者の役割(1)	15	まとめの復習、学習内容の理解度確認のための筆記試験、解説
8	幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領における「人間関係」のねらいと 内容(2)乳児～3歳未満児について		

筆者の考える「シラバス・レベル」の考え方は、「短期大学の今後の在り方」から考察したものである。

学生の個に応じた授業を実践するには、「卒業時までには学生に身につけさせたい力」と「教育する側」との関係を考えて時に、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーの関係になる。その時に、抽象度の高いディプロマポリシーでは具体的な内容は書かれていないので、それを身につけさせるための教育内容を示したのがカリキュラムである。しかし、そのカリキュラ

ムも具体的な教科の内容についてはシラバスに表されることで具体化される。そのシラバスも時代背景や学生の質などなどによって内容を変えたり工夫をする必要がある。つまり学生理解が必要であり、対象となる学生に応じたシラバスを工夫しないとただ教科書に沿って進めるだけでは不十分であるということの意味している。多くの教員は対象となる学生レベルをとらえて、それに応じた授業に換えると思われる。ただし、学生の質に合わせてレベルを下げると学修成果やディプロマポリシーを果たすことは

難しくなる。学セリを引き上げ社会に送り出す時に必要な力を身に付けさせるためにはその都度シラバスレベルの工夫や変更が必要である。

(2) 事例問題

【事例：とことん「なりきる」】

園庭の山へつづく道を登っていると、「サササッ」という声がある。振り返ると、数人の忍者がさっと身を伏せた。その中の一人が「おい、ダンゴムシのポーズだぞ。ちゃんと頭を隠さないと、見えちゃうぞ」と言っている。どうやら、忍者の隠れ身の術のようだ。「おや、声がしたけれど、気のせいかな」と言いながら後ろを向いて歩き始めると、また「サササッ」と言っ

【グループワーク】

- ① 忍者になった子どもたちが仲間のなかで共有しているものは何でしょうか？
- ② 事例から読み取れることをグループ内で話し合い共有してみましょう。

事例問題を考える上で重要なことは「科目間連携」の視点と、関連させて「考える」（読解力、要約力、語彙力等）ことである。つまり、一人ひとりが「問い」をもたねばならない。そのために、「アウトプットを想定したメモ力」とグループワークの失を高めていく授業展開である。

(3) 質の高いグループワーク

オリエンテーションでは「私の授業は、教壇を降りてみなさんと同じ目線に立ち、積極的に机間を移動し、学生と対話しながら授業を進めます。理論と実践をリンクさせながら問いかけ、意見を求め、解説を加えます。授業では、アットランダムに指名（適度な緊張感）し、「自然体」で発言を求めながら『アドリブ』力（とっさの質問や急なスピーチなどにも対応できる等）も強化し、グループワークの中で『司会力』も習得する『双方向授業』です。

合わせて『社会人基礎力』の視点からマナーや言葉遣いの指導、時事問題の解説も同時に行

います。特に、基本的な『学習の構え』を重視し、礼儀作法、姿勢、返事、反応、表情、メリハリ、リズムなどをベースに討論の仕方等、授業のすべてで『リアルタイム』に学んでいきます。一つの方法として社会人学生のキャリアにも大いに学びましょう。」と伝える。

学生は、保育者になれば、「一人」で考え、問題解決していく「考える力」が求められる。逆算してみれば、時間はない。社会人キャリアにも学べる学級経営（科目経営）が求められる。授業展開の中で社会人学生が「キャリア」をどのように積み見上げてきたかを共有する中で一般学生の「当事者意識」を高める一助になる。

これらを踏まえて、リーダーを中心に、与えられたテーマについて、まずはそれぞれがテーマに関する自己の経験、感想、考察をノートに記入していく。その後、グループで個々の意見を発表し合い、自分のノートにグループ内全員のコメントをまとめていく。その中で意見の相違や総意を話し合い、まとめていく形式をとる。代表発表等で指名を受けたら、立って、全体に聞こえる声の大きさを意識する。「アウトプット」するには、しっかり聞かなければ、書かなければ（考えなければ）、まとめなければ（要約しなければ）、ちょっとばかりの勇気も。リーダーはまず雰囲気づくりを大切にする。

ある学生は「今日の授業はグループワークが中心だった。参観方式のグループワークは初めてで人の目線をものすごく感じて緊張した。しかしリーダーの方がいつも通り接して進めていってくださったので意見を出し合ったり質問したりと前回よりも良い「話し合い」ができたのではないかと感じた。同じ事例問題を解くにしても意見が違ったり同じ意味だけど言い方が違うのでたくさん学びを得ることができる。話し合って終わりなのではなくきちんと話を最後にまとめたことによって発表の時少し緊張が軽減されたように思う。発表の時は人の目線が1点に集中するので頭が真っ白になりかけてしまう。だが、その中でも笑顔で聞いてくれる方、うなずいてくれる方もいらっしやっただけで少し嬉しくなった。普段からうなずいたりすること

を心がけているが、発表をすることによって改めて人の話は心を込めて聴くのが大切だなと感じることが出来た。また、他のグループの話し合いを見て共通しているところは目線を合わせて聴いていること、メモを沢山とっているところ、相手の意見を共感しているところだった。話し合いをする際は相手意識を持ちみんなで話しやすい環境作りをしていくことが大切だと感じた。普段よく話す人でない場合は緊張するが、共感し、認め合うことで友達との仲も深まるのでグループワークはとてもいい機会になるなど改めて思った。今回の参観方式のグループワークでは普段よりも深く多くの学びを得ることが出来た。今後は今回他のグループのいいなと思った所を真似したり自分の意識を変えてもっと良い学び合いができるようにしたい。」とグループワークでの学びを授業の振り返りで考察している。

ある学生は「今回は3つの事例についてグループ内で意見を出し合いました。グループワークをする上で大切なことは沢山あるということを変更して学びました。その中で私たちのグループはみんなが意見を出し、それについて疑問があれば聴き、リアクションもきちんと取れていてバランスが取れているのではないかと感じました。司会者の方は毎回話しやすいように内容を広めていたりどんな意見でも共感してくれる周りの人がいるので自然と話しやすい環境ができていくことに気が付きました。今までたくさんのグループワークをしてきましたが毎回良くなっていることを感じられます。私は事例を読んで少し考えてから自分の意見を出しています。しかしいずれは読んだ後自分の意見をひとまとまりの文にして、スラスラと班の方々と共有していただければいいなと思っています。まだまだ自分にとって足りないこと課題は多くあるなど毎回痛感しています。これからはグループワークを通してたくさんの方々のいい所を探し、もっと良い学び合いをして成長していきたいです。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は「今回の授業でもクラスの方々の1分間スピーチを聴いた。クッキー屋さんの事

例のことについてと自己紹介についての発表だった。まずTさんは、話す時にずっと紙ばかりを見るのではなく少し目線を上げて話されていた。相手に伝えたいという意識が伝わってきた。Sさんは、自分の好きな食べ物についてだったが、ただ好きと言って終わるのではなくひとつの事について順序よくまとめられていた。また、ゆっくり話されていたので聞き取りやすいなど感じた。Kさんは相手に伝える言葉遣い等が上手いなと思った。スラスラと話されていたので頭の中に伝えたいことがきちんと整理されているからかなと考えた。Eさんは声の大きさが丁度よく話し方、言葉のチョイスが素敵だなと感じられた。Fさんはよく通る声を持っているなと思った。また自分のことを発表して終わりにするのではなく人に勧めるという流れがとても自然だったなと思った。Hさんは事例についての発表でもとても緊張されたが相手に伝えようと何度も目線をあげているところがとても良かった。Iさんは紙に全部の文章を書かず要点だけまとめ自分の言葉で発表されていた。「読む」のでは無く「伝える」というのを意識されているのではないかと考えた。私もこのようなやり方ができるようになりたい。」と授業の振り返りで考察している。

また、ある学生は「1分間スピーチを聴いてやはり文章はダラダラ書くのではなく短い言葉でまとめることの大切さを感じた。文章が長いと伝えたいことは何なのだろうかと聞いている側は理解がしにくくなってしまう。これからは短く伝えたいことをまとめるということ意識していきたい。また、授業での話の中でスピーチは始めから100パーセントを伝えようとしないでいい、完璧な話をしようとしなくていいというのがあった。私は何事もやるからにはしっかり準備して完璧にしなければいけないと思っていた。しかし、クラスの方々の発表を聞いていく中で自分自身の最大を出そうとする心や伝えようとする意識の方が今は大切な事なんだろうなと言うことに気づいた。この短大という短い期間にどれだけ自分を伸ばして行けるかが重要になってくると感じたので1歩ずつ着実に

成長出来るように考え方を考えていこうと思った。2年間でたくさんの経験をして自分の力を伸ばしていきたい。」と授業の振り返りで考察している。

4 研究の考察

本研究の目的は、現場で求められる「考える力」のつく授業改善を進めることであった。保育者の離職率は、厚生労働省の調査データによると、全体では「10.3%」を超える。新卒の保育士の場合は、勤務開始後1年以内の離職が「25%」、3年以内の場合は、「約半数」が離職しているという。要因は、「人間関係」の悩みによる離職も多い。入学時から友だちづくりができない学生や、学生生活で友だちができて途中から人間関係に悩む学生も多い。また、学生は実習が始まると、子どもたちのけんかや、いざこざに直面し、どう対応すればいいのか悩んで帰ってくる。どんな「言葉かけ」をすればいいかが分からないという。現場に出れば保護者や同僚をはじめとする幅広い人間関係を構築していかなければならない。

ある学生は「本日の授業の中で、保育者は地域の方々への支援も行うといった話があったが、改めて保育者という仕事の重みを感じた。特に少子化や核家族化が顕著な現代社会においては、地域の方々への支援は非常に大きな役割であろう。園に通う保護者の方々へはもちろん、園に通っていない保護者の方たちへも支援の手を差し伸べられる保育園・保育者が今まさに求められているのかもしれない。必要な支援を必要な方へ届ける為にも、まずは専門的知識を確実に身に付け、一つひとつの学びを自分の力としていきたい。

ある学生は「相手意識という言葉が本日も出てきたが、これは私自身大事にしたいと心掛けるポリシーの一つである。私たち人間は、(特に大人になるにつれ)自分の考えに固執しやすい傾向があるように思う。すなわち「相手意識」に立つことを忘れやすいということである。私たちは人との関わりなくして生きていけない。

そのような環境の中で、相手を意識せず自分本位の姿勢でいるのは少々勿体ないような気もする。もちろん自分の気持ちを大切にすることは非常に大切なことであるが、自分の気持ちを大切にすると同じくらい、相手の気持ちを大切に出来るような余裕のある人でありたい。これもなかなか難しいことであるが、常に「相手を大切にする」という心掛けだけは忘れないようにしたい。そして、この心掛けを大切に出来る保育者でありたい。」と授業の振り返りで考察している。

ある学生は「今日はみんなの前に立って発言する機会があったがやはり緊張するし用意していた言葉でも出てこないことがある。子どもの前に立ってもどう伝えるかは自分にとって大きな課題である。事例問題では子どもの活動について考えたが、グループで話し合うとひとつの同じ活動でも本当に捉え方が様々で面白い。捉え方が違うということは保育の仕方もさまざまであるということである。現場に出ても問題解決のために話し合う場が設けられると思うが、意見が分かれたりすることもあるだろう。自分の考えが違ったりすると自信がなくなることもあるが先生がいつも保育に正解はないよとおっしゃるのでまず自分で考えてみて共有していこうと思う。」と授業の振り返りで考察している。相手の欠点よりも、長所を探し出すことである。人間なら誰も長所も欠点もある者同士がつきあうのであるから、できるだけ長所を見つけた指導を心がけた。相手の長所を素直に賞賛すれば、相手にも伝わる。他人の優れた点を認めれば認めるほど、刺激を受け、自分をどんどん高めていくことが授業の振り返りから見えてきた。

5 まとめ

ある学生は「今回の授業を聞いて日本国憲法と言語表現と人間関係の授業は繋がっているということがわかった。別々の授業のように見えて身につけていく力というものは似ているのかなと感じた。また、今後の目標としては自分の

言葉で理論的に説明できるようにならなくてはいけないという説明があった。この目標を達成するためにまずは授業を集中して聞き返り返りは相手意識を持ってしっかり書いていくことが大切なのかなと考えた。こうすることでアウトプットしていくことが出来ると思う。そして振り返りなど書いたものはしっかりと読み直すことの大切さも学んだ。自分で読み直すことも大切だが、相手に読んでもらいたいアドバイスなどとして頂けると自分の成長に繋げることができるはずである。読んでもらう時には相手もエネルギーを使うことになるので書くときには相手意識を持つことを心がけたい。」と授業の振り返りで考察している。

これまでの振り返りの考察に見られるように健全な自尊感情を育てる土壌ができつつある。それは、自分自身の長所に気づいて、それを磨くことに気付いたのである。自分の良いところを磨いて小さな成功体験を積み重ねる。「私もできるじゃないか」と自分を褒めてあげる。自分を甘やかしたり、うぬぼれたりするのではなく認めてあげるのである。それが、人を助けて感謝されると効果は大きい。最初から大きな成功を目指さないこと。高い目標を掲げるとなかなか成功しないので、自己嫌悪に陥ってしまう。相手を認める心のゆとりが生まれることで、私たちはより良い人間関係を築くためのスタートラインに立てるであろう。「認め、褒め、励まし、伸ばす」ことこそ、人間関係を豊かにしていく近道なのかもしれない。

大学教育学論集第70号 pp. 109-123

- (4) 濱名陽子「保育者の早期離職に関する考察—養成教育との接続の課題—
- (5) 神垣彬子「保育士養成校における領域『人間関係』の授業形態についての研究—子ども人間関係の形成を効果的に援助・促進するために—」川崎医療短期大学、2009、pp. 225-228
- (6) 神垣彬子「保育者養成校における領域『人間関係』の授業のあり方についての研究—グループ・ディスカッションを用いた事例学習の効果—川崎医療短期大学、2010、pp. 45-56
- (7) 藤原和博「人間関係」ちくま文庫、2007年、p 44~p 45
- (8) 中谷素之「学ぶ意欲を育てる人間関係づくり」金子書房
- (9) 犬飼己紀子他「保育者として自己覚知の必要性～グループワーカーとしての保育者像～」上田女子短期大学紀要、
- (10) 全国保育士会研究紀要委員会「保育研究の考え方・すすめ方」
- (11) 大塚裕子他「話し合いトレーニング」ナカニシヤ出版、2011
- (12) 三浦真琴「グループワークのその達人への道」医学書院、2018
- (13) 無藤隆「領域 人間関係」萌文書林
- (14) 茂木健一郎「質問力」河出書房新社

【参考文献】

- (1) 「Shin-ai chapel News」久留米信愛短期大学、2022年
- (2) 中央教育審議会大学分科会大学教育部会短期大学「短期大学の今後の在り方について(審議のまとめ)」2018年
- (3) 岸寿他「保育内容『人間関係』の指導法の意識に関する一考察—保育者の経験年数に着目した質問紙調査の結果から—、創価